

第12回日本プロオーケストラファンクラブ協議会総会 札幌総会・幹事会議事録

幹事会議事録目次

開会のあいさつ	-----	J O F C 幹事長 西川 吉武
議事	第4期 J O F C 役員改選について 次期以降の J O F C 総会の開催地について 都響倶楽部 J O F C 交流会の開催について 北海道胆振東部地震義援金の募金について	
各クラブの現況について	-----	山響ファンクラブ ----- 群響ファンズ ----- 都響倶楽部 ----- 広響フレンズ ----- 名フィル・ファンクラブ
閉会のあいさつ	-----	村岡 範男(札幌くらぶ事務局次長)

○西川吉武(幹事長) 一つ目の議題、J O F Cの役員改選について、今年は役員改選の年なので、これらについていろいろメールでやり取りしたり、あるいは、山形の加藤さんの御意見をいただいたり、さまざま検討したところ、このまま今年については留任することとし、これを契機にもう少し役員改正について次世代型にするための時間をしっかり設けた上で議論することにしました。

今回、役員改正については全員留任ということで、私も武藤も上田会長ももう一期続投するというので、御容赦いただければありがたいと思います。

よろしいでしょうか。

(拍手)

○西川吉武(幹事長) この件については、これからの取り組みのほうにむしろ重要なというふうに考えており、できればこのJ O F Cの未来像も含めて、この後3月17日に都響倶楽部が交流会開催されますので、その際に集まれる方で結構なので、何人かで意見交換できればと思っています。

そのことについては、篠原さんをお願いするのではなくて、私の方から場所と時間について御連絡を差し上げて集まっていたいただき、次期体制、次期ビジョンみたいなものを語り合えればと思っています。

それについては、早々に、この総会が終わってから色々検討を繰り返した上で、皆さんに御周知申し上げたいと思います。

幹事会の議題について、まずJ O F Cの役員改選についてはそうすることで、皆さんの御了承いただいたということで、総会のほうで御報告させていただきます。

二つ目の議題について入りたいのですが、肝心の山形がいらっしやっておりますので、そろい次第ということにさせていただいて、その前に都響倶楽部のJ O F C交流会の開催について報告させていただきます。



- 加藤 聡（山響ファンクラブ顧問） こんにちは。
- 西川吉武（幹事長） ちょうど、タイミングよく来ますね。その間ちょっと、もう少しの間、食事してください。
- 加藤 聡（山響ファンクラブ顧問） ごぶさたしております。
- 西川吉武（幹事長） 加藤さん、飲みながら食べながらで結構です。今ちょうど1番目の議題が終わったところです。
- 加藤 聡（山響ファンクラブ顧問） それは大変失礼しました。

○西川吉武（幹事長） それでは役員は全員留任ということとし、ただしその留任以降は、都響倶楽部のJ O F C交流会開催のときに、皆さんに集まってお打ち合わせをしたいということにしました。佐藤さんも来ましたので、続きを始めたいと思います。

役員改選については、今、説明したとおり全員留任ということで、ただし世代交代をしていかななくてはならないということも含めて、都響倶楽部の主催する交流会に開催するに先立って、集まれる方で打ち合わせができればありがたいと思います。

○西川吉武（幹事長） 二つ目の議題に入りたいと思います。

二つ目に入る前に、今日、議案書を本当は皆さんに配付する予定だったのですが、議案書としてホテルのほうに全部まとめて送ってしまっていますので、綿sからの説明で議案書にかえてお許してください。

二つ目の議題、来年度以降のJ O F C総会の開催についてということで、前回から2回

分をワンセットで考えていこうと幹事会で意識統一をしていき、前回、札幌に決めていただく時に、仙台は次回いかがでしょうかということをお話させていただきました。前もって打診もさせていただいている関係もあって、仙台さんのほうで次回開催、よろしいでしょうか。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） はい。

○西川吉武（幹事長） ありがとうございます。では仙台の次の開催地は、順番でいきますと山形になるわけなのですけれど、この辺についてはいかがなものでしょうか。

○佐藤 彰（山響ファンクラブ代表幹事） やる方向になるだろうなということで、検討はしております。この年というか再来年、山響も創立30周年という年になるので、やらないわけにはいけないでないのかという気持ちだけはもっています。できるかどうか、今から精査します。

○西川吉武（幹事長） はい、わかりました。ということで、総会の席では来年度の開催は仙台では確定、再来年度の山形については鋭意努力ところで発表させていただきます。ありがとうございます。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） それでは口頭ですけれども、一応開催日について、仙台フィル事務局の協力を得ましたので、来年の11月23日で準備させていただきたいと思っております。

○西川吉武（幹事長） 11月23。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） 土曜日、祝日の土曜日です。因みに曲は発表すると言われてきたのですけれども。指揮者は高関さんですけれども。

○西川吉武（幹事長） よろしく願いいたします。

J O F Cは仲がいですよ。高関さんと。11月23、月曜日ですね。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） いえ、祝日。来年。

○西川吉武（幹事長） 来年でしょう。

2020ですよ。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） 2019。

○西川吉武（幹事長） ごめんなさい。

○佐藤 彰（山響ファンクラブ代表幹事） 再来年。オリンピックと重なっているからからどうしようかなと。オリンピック終わった後だといいいのかもしれない。

○西川吉武（幹事長） オリンピック8月だから。

山形さんは開催する2020年といったら、なかなか厳しい時ですよ。

○佐藤 彰（山響ファンクラブ代表幹事） 余り盛大にはできないはできないかと思えます。現状です。済みませんが、一応、気持ちだけということで。

○西川吉武（幹事長） それでは、来年は仙台で、再来年は山形でということで、都響倶楽部の篠原さんのほうからJ O F Cの交流会について改めて皆さんにアナウンスさせていただきたいと思えます。お願いします。

○篠原敏修（都響倶楽部代表） 既に事務局長の武藤さんのほうから二度ほど各クラブのところに案内文と参加者名簿添付で来年の3月17日の都響コンサート聴いていただいて交流会開催をというお知らせをさせていただきました。現在のところ、31名の方が参

加していただきまして、交流会の参加の方が22名ということで、今、準備をしております。

この演奏会は、エリアフ・インバル元都響の音楽監督がブルックナーの8番を指揮するという、8番1曲だけの演奏会ですけれど。大変いい演奏会になるのではないかなというふうに思っています。

チラシを持ってきたので、後で総会の時にでもお配りしたいと思います。実は、昨日、一般発売だったのですね。その前に席を抑えまして、連絡もらって、42席をしっかりと抑えたのです。

○西川吉武（幹事長） ありがとうございます。

○上田文雄（会長） 済みません、まだ余裕ありますか。

○篠原敏修（都響倶楽部代表） ないです。即日完売はないだろうな、と都響に言ったら、多分、残念ながらもとのことです。席は離れるかもしれませんが、なくなるということはないと思います。決まりましたら随時連絡いただければ・・・。

あと、費用のコンサートのチケット代と、交流会に参加される方は交流会の費用ですが、振り込んでいただくことになりますので、その御案内は改めて連絡します。10月31日までに振り込んでいただくということだけはお知らせしてありますけれども、口座番号とか、まだ御連絡していませんので、それは改めて御連絡したいと思います。

○武藤義典（事務局長） はい。私の方にいただければ対処します。

○加藤 聡（山響ファンクラブ顧問） 3月17日は、日曜日ですか。

○武藤義典（事務局長） 日曜日ですね。私のほうは。チケットも取って、ホテルも予約してあります。

○山田博子（名フィル・ファンクラブ） あらすごい。

○武藤義典（事務局長） 早く手配しないと、東京のホテルの予約がとれなくなる。

○山田博子（名フィル・ファンクラブ） そうなんですよね。

○佐藤 彰（山響ファンクラブ代表幹事） インバル、ブルックナー全部振ってきたし、マーラー振ってきたし。

○武藤義典（事務局長） 栄浪さんだけ申し込んでいます。

○佐藤 彰（山響ファンクラブ代表幹事） これの開演時間は・・・。

○篠原敏修（都響倶楽部代表） 午後2時です。彼は、ブルックナーの原典版というのをやるのが得意の人なのです。ちょっと珍しい。武藤さんから皆さんに連絡したときに、うちの都響倶楽部の山本さんというのが、このコンサートとはどういう意味があるかということを書いています。改めて見ていただければと思います。ということで、これからもまた行けるようになったという方がいらっしゃいましたら、御連絡いただければぜひ対応いたします。沢山の方に。来ていただければと思います。

○佐藤 彰（山響ファンクラブ代表幹事） 2名追加は間違いない。

○武藤義典（事務局長） 一応、お申し込みは私の方をお願いいたします。

○上田文雄（会長） 私も行けそうですので。加藤さんとは席を離してください。

○武藤義典（事務局長） 会長も来るのですか。

○上田文雄（会長） 行きます。

○武藤義典（事務局長） ではチケットと交流会の両方ですね。わかりました。

○上田文雄（会長） はい。

○武藤義典（事務局長） わかりました。追加ですね。

○篠原敏修（都響倶楽部代表） 追加ですね、ありがとうございます。

○西川吉武（幹事長） そういうことで、初めての都響倶楽部さんとの交流会になります。そういう意味では、それぞれの持つ思いはあるにしても、意味があるものというか、楽しく過ごせれば一番かなという感じがします。そこからが、物事出発するのだろうといつも思っています。そういった意味でぜひ、交流会を意味のあるものにしたいと思います。交流会の参加者は今三十何人ですか。

○篠原敏修（都響倶楽部代表） 今、交流会は22です。

○武藤義典（事務局長） 今、4人増えました。

○西川吉武（幹事長） すごい人数になりそうで何よりです。

それでは今日、4番目の議題、最後の議題になりますけれど、群響ファンズの小野会長のほうから、課題を提起していただき、今回の震災に関して、小野会長から説明いただきたいと思います。小野会長お願いします。

○小野善平（群響ファンズ会長） ちょうどJ O F Cの総会を開催する時期にこの震災が起きたという中で、何らかの形で支援というか、復興支援ということ掲げて関わらなければならない、そして、やはり私たちは地域のオーケストラを応援ということは、オーケストラ自体を応援するということがなくて、地域の生活を豊かにするという、その一環としての活動であるということ踏まえたとき、今回の地震をとおしてこんなふうに避難生活している、その中で、音楽を支援するだけではなくて、やはり生活支援、復興支援ということを含めて考えるべきではないのかなということ皆さんも思っていると思うのですが、このJ O F Cの存在が群響ファンクラブ自体、幅広い人に私たちもこういう思いを伝える機会となるのではないかなと思って、やるのはどうだろうかと思った次第なのです。

6日の定期演奏会では私たち2人しか参加できなかったわけですが、会場でもおそらくこの支援、復興支援の義援金ではないかなと思いますけれど募金をしておりました。私たちは、ここにこうして札幌、あるいは震災の地に、ちょうどその時期に集まっているということで、義援金の募集をしてはいかがかなと思った次第なのです。突然であれなんですけれどもご検討をお願いいたします。

○西川吉武（幹事長） 仙台も広島も、今回は札幌もということで、あるいは九響あたりは熊本地震。それぞれの団体が、それぞれのオーケストラに貢献しようという気持ちが醸成されてくるというのは非常にいいことだというふうに思いますので、額の多寡はわかりませんが、その趣旨でカンパを募るということは、各J O F Cの仲間ということで取り組んでいただくことは大変ありがたいことだなと思います。

札幌自体の被害はなかった、コンサートもいくつか中止した？

○上田文雄（会長） 中止が二つかな。

○武藤義典（事務局長） 二つ中止になりましたね。

○西川吉武（幹事長） そういう意味では損害はあるわけです。

そんなわけで、札幌を応援していただくということであれば、それはそれで大変助かるというふうに思います。

形としては、どうでしょうか。皆さんどこかうちの口座でも使って、それぞれ取り組んでいただいて、多少の義援金を募集し、それらを札幌さんのこれからの演奏会に役立ててほしいというのか、それとも札幌市の災害に寄与するというのか、北海道に寄付するとか、あるいは赤十字にするとか、様々なやり方はあると思うのですけれど。

札幌くらぶ自体は、特に損害でているところはありませんので。私も本2冊落ちただけと、携帯の電池が切れくらいのもので、ほとんど影響はなかったのですけれど。一部の地域では、大変な思いをしているところもありますものですから。

今、生活支援というふうなお話ございましたけれども、それはどうなのでしょう。と言うよりも、オケに特化した方がよろしいではないでしょうか。

もし、形があるとしたら、札幌くらぶほうで集めさせていただいて、これらをまとめた段階でJ O F Cの寄贈ですということで、札幌さんにどのように使い道を限定しないでお渡しするというようなことが一つ形としてはあるかなと思います。

今回は参加が叶わない状況ではあったのですけれども、北海道知事、それから札幌市長、この両者に対しては御挨拶文をいただいています。そういう意味では知っていますので、そういう行政のほうにプレゼントするという方法もあるかもしれません。皆さんの決めた内容で結構だと思うのですけれど。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） 私どもは、群響ファンズさんから、仙台フィルハーモニークラブ宛にいただきましたので……。

私たち、SPC宛に群響ファンズさんからいただいたので、私たちの中で考えて、招待、SPCシートとということで、チケットプレゼントに使わせていただきました。

○武藤義典（事務局長） そういう方法もありますものね。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） はい。

○上田文雄（会長） 被災地として色々見ていると、やはり生活者への支援という部分と、それと被害の大きかったところに音楽家が行って、そこで音楽活動をしていることが一つの支えになっているのですね、地域の。ですので、私などはどちらかという、音楽活動を通じてその被災、被害の大きかった地域や人々を支えてほしいというような趣旨で、例えば札幌にそれをするとか。あるいは文化部門の北海道の道庁の部門でやるとか。これで被災地をぜひ音楽で支えてくださいという趣旨で、それは希望レベルで付け加えてやるというのも一つではないですか。

○西川吉武（幹事長） いいことです。

○上田文雄（会長） せっかく、私たちのこの音楽団体やることですから、音楽芸術に使っていただきたいということを特化したほうが、直接的な支援になると思いますし、あともう一つ私よろしいですか。広島も大変だったと思うのですけれども、広島のほうの被害ということにおいては、結構市内も水害のほうが大変だったと思うのですけれども。

○佐藤幸一（広響ファンズJ O F C担当） 広島については、ちょうど大雨の翌日が7月の定期演奏会だったんです。これは中止になりましたけれども、幸運にもジュンメルクさんの初めての指揮だったのですが、うまいこと日程がついたということで、12月29日に振り替えの定期演奏会できました。それ自体、もちろん多少損害というのはあったと思うのですが、北海道みたいな大きな損害はなかったと思います。

だから、広響とかそのものについては、別に必要ない。必要ないと言えばおかしいです

が、金銭的な支援は今のところ必要ないと思います。

避難している人たちに、音楽会を開くとか、避難所に行ってミニコンサートみたいのをやるだとか、そういうことはないのでしょうか。

○西川吉武（幹事長） 私たちの震災の場合というのは、ある程度局所に限られています。厚真町の辺りに集中していますので、そこに音楽を派遣して欲しいというイメージを込めて、確約ではないにしても、その方向で検討くださいということで、それにお使いになる費用の一部としてということで寄付するのはいいと思います。

1回でも2回でも実現すれば、気持ちが伝わるような気がします。

最後に私のほうお聞きしようと思ったのですが、それは各ファンクラブので寄付するのか、それともJOF Cの実行委員会からという形で寄付するのか。

○小野善平（群響ファンズ会長） 私自身考えたのは、簡単にすると考えたのですけれども、おそらく札幌のところでもちゃんと募金箱があるのでしょうか、そこだけでやる方も多いでしょう。そうして東日本大震災のときは、私たち自身も震災の怖さというのを目の当たりにした中で本当に当事者大変だったということから、ファンクラブの活動としても浸透できたと思うのですけれども。

今回の広島のことについては他人ごとのような形で、決して考えられなかった。そして北海道の震災も群馬から見ますとちょっと他人ごとであって、なかなかファンクラブとしての活動として盛り上がるというのは実際難しいのではないかなという感じあるわけなのです。

私たちやはり、ここに集まったというところからですから、この場で、総会の場にまで募金箱設けて、決して多くなくてもその中で出せる気持ちを出すということではないかなということです。

あとは持ち帰って、ファンクラブでやるとしても、それはそれでそうしたものがあればいいでしょうけれども、ここに集まった私たちがわずかでも出せばいいのではないかなということです。

額は小さいかもしれませんが、決して音楽だけのことではないということ。音楽を通してという形で、今のお話ですが、やはりその復興支援の中の感じで気持ちを伝える。そしてそこにJOF Cがあり、札幌くらぶがある。当事者として伝える役割にもなるのではないかなと思ったのです。

一応ということで、私の仲間で群響のためによく募金箱を置いてくれる人がいるのですけれど、今回その人自身が1円玉募金で集めた、やはりこの群響ファンズ、これは今回こちらのほうに寄付してよろしいかと了解を得て、若干ですけれども、それを加えるとわずかですけれど、少しかさばる形になるような額になるのではないかなと思ってですね。ですから、この総会の中で参加者が必要があるのであったらわずかでも募金を出し合う、そして必要があればまた持ち帰ってファンクラブでポスターにしても、そういう形でいいのではないかなという形で簡単にちょっと提示させてもらったものですが、それはこの中で討論し、話し合っただけであればと思います。

○西川吉武（幹事長） 山田さん何か御意見ありませんか。

○山田博子（名フィル・ファンクラブ代表幹事） 名フィルも既に、2回定期演奏会の時に募金やっていました。それで、今日はJOF Cとして募金をする。それだったら私た

ちも参加してもよいかと。

○西川吉武（幹事長） J O F Cとして、出しておくというのは大事なのではないかなと思うし、札幌くらぶもそういう活動にかかわっているということ。

○山田博子（名フィル・ファンクラブ代表幹事） こういう団体があるということ。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） ただ、やはりJ O F Cは音楽の団体ですから、今、札幌の楽員からこういうところでこうやって募金やっていますけれど、あるいは行政もやっていますよね。やはりそうではなくて、癒しに使っていただければうれしいなというような。札幌自身に、札幌がどういうふうを使うか、それは色々事情があるでしょうから。そういう気持ちを添えてというくらいでいいのではないかなと、今お話を聞いていて思いました。

○西川吉武（幹事長） わかりました。では、今の意見を集約して、今回参加者にこのことをお伝えをして、その場でJ O F Cの会場でいただく寄付と、あわせて今後の取り組みでもし各団体が取り組んでいただけるのならば、こちら宛に送ってくださいというようなことで一定の期日を決めて、私どもがお預かりをするということにします。それについては、先ほど長島さんおっしゃっていたように、音楽に関連する被災地応援というようなところに、義務はないけれど、こういうことに使ってほしいと願っていますということで、札幌さんの方に寄付をする。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） 話が変わりますけれども、すごく団員も来てもらった方も一番よろこばれたのは、中学生の吹奏楽のクリニックが一番よろこばれました。中学校の吹奏楽部に団員が行って指導してミニコンサートを開催する、町の人のためにやるというのが一番、団員も一番それがやりたいという人が多くて。ただ、弦楽四重奏聴かせるのもいいのですけれども、一番中学生に元気になってもらうというので、ブラスバンドの指導に行き、ブラスバンド部が町の人のためにコンサートを開くのが一番本人たちも団員も喜ばれます。

○佐藤佳世（仙台フィルハーモニークラブ事務局長） あのとき楽器がみんな水に浸かってしまって、修理して。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） もちろんその楽器の、簡単に言うお金というのも大切なのですが、一緒に仙台フィルの人に教わった被災地の中学生が、それでみんなのためにやったというのが一番町のおばあちゃんたちもよろこんだし、本人たちも、あと団員、教えるほうもそれが一番やりたいという人たちが一番いたので。そういうやり方もとてもいいと思うのです。

○西川吉武（幹事長） 了解しました。

○小野善平（群響ファンズ会長） 厚真町のあの状況の中で、ブラスバンドで随分活躍していた人がいたのですよ。

○佐藤佳世（仙台フィルハーモニークラブ事務局長） そうですね。いましたね。

○西川吉武（幹事長） 皆さん詳しいね。

○佐藤佳世（仙台フィルハーモニークラブ事務局長） テレビ点いてたものですから。

○西川吉武（幹事長） 私たちは電気が切れていたからテレビ見れてないんですよ。いま電気がないと何もできないのですが。

いまおっしゃったようなこと、音楽に関連する札幌さんの施策の中を支援していくとい

うことで、確かに例えば、といえば現地でのコンサート支援、復興コンサート、あるいは楽器クリニック等々もあるでしょうから、こういったことを附した上で、改めて皆さんにお話ししたい。

今日の総会報告の中でこういう提案があって、このようにしたいと。追って皆さんにまたお願いをするかもしれないということで、整理をしたい。ついては、この総会の場で寄付金していただける方については、お願いしますということにしたいというふうに思います。

そんなまとめでよろしいでしょうか。

○小野善平（群響ファンズ会長） 箱はありますか。

○武藤義典（事務局長） 箱はないなあ。

○佐藤佳世（仙台フィルハーモニークラブ事務局長） 何か入れるもの……。

○武藤義典（事務局長） 袋でもいいんじゃないですか。

○西川吉武（幹事長） あるいは、キャッシュかもしれませんし。こんなことで、やらせていただければと思います。今日の議題は以上で、4点で終わりです。演奏会2時からだから1時間半はあります。あと30分、40分程度雑談、あるいは皆さんの概況報告というようところで幹事会が皆さんで情報共有できればありがたいと思います。そんなことで、よろしいでしょうか。

では、山響さんから。

○佐藤 彰（山響ファンクラブ代表幹事） 急に振られたので、どういうふうな話をすればよいのでしょうか。

○西川吉武（幹事長） もちろん、なんでも結構です。私たちも山響さん今どうなっているのか、ファンクラブと、それからオケそのものがどんな状況下にあるのか。ファンクラブの環境だとか。この辺はやはり皆さん興味もっていると思いますので。一言もらえると嬉しいです。

○佐藤 彰（山響ファンクラブ代表幹事） はい。一応、かつてのような勢いがありません。なんというのでしょうか。事務手続きの感じで、一応会費をいただいて経理をやって、決算を出してということで毎月総会の資料だして、皆さんに見てもらってはいます。

特段、かつてのような形で団員さんを集めてというようなことも、なかなかスタッフ相互が忙しいということがあるのと、やはり頑張りすぎてちょっと疲れたかなという人も中にはおまして、休んでいるような状況です。

ただ、そういうようなサイクルだけは会費をいただいて、必要な会報を作って送ったりとか、そういうふうな事務経費を必要な部分で出して、それで1年おきに決算を出して、それで単年度でもらったお金と足したお金が余っているときは楽団のほうに寄付するということは毎年やっていこうというような形にして、総会の席では了解をいただいて、進めていくものというふうなことでやっております。

ですので、そういう形であれば、ずっと単年度単年度で積み重ねていくことはできるかなと思うのです。ただ、それだけでいいのですか、と。もっとやりたいことはないのですか、やってほしいことはないのですか、と会員さんに問いかけてはいるのですが、現時点では何も出てこない。何というのでしょうか、発破のかけかたとか何とかも工夫が必要なのかもしれませんが、そういったことでやっていくと。

一応、単年度収支で残った会費を寄付するけれど、それに積立金を上乗せて楽団のほうに寄付しているので、だんだん貯金というのは減っていくので、10年か15年くらいになると一応底がつくので、その時にはやめにしませんか、という話になるのだろうかとは思いますが。ただ、5年10年先、色々風が吹くでしょうし、色々なきっかけがあると思うので、それをとらえて上向きに行ければいいのかなというふうなところでやっていくところです。

一応、楽団のほうは事務局長さんに西濱さんを迎えて、西濱さんという方が結構あちこち精力的にセールスをやっているような形で、団の運営としては、外から見るとかなり安定しているのかなと。不安要素がないので、ファンクラブとして盛り上がらない部分も要素としてあるのかもしれないしなというのはあるのですが、それでも今順調であるのであれば、それに手を携えてやっていく方法というのはないのかな、ということは常日頃考えていかなきゃならないかなというふうには思っているところです。

今はちょっと静かな感じで、ちょうど炭火があって、多分そこに薪をくべれば、ぽーっと燃えるのでしょーけれど、いつでも燃やせる状態にしておくのが私の今の役割なのかなということで考えているところでした。

一応、積極的にあれをやります、これをやりますと各団体さんやっぺいらっしやるので、その話を聞きながら刺激を受けたいなと思っております。来年、再来年の山形は、やらないといけないのかなと。一応さっきも創立30周年、そんなに大げさに騒ぎたいわけではないのですが、隣に建てている県民会館が来年でき上がるので、できあがった県民会館見ていただきたいなというふうな、そういうふうな意識もあります。

そういったこともありますので、何もやっていないので潰れるかもしれないというふうな御心配を多々方面いただいておりますが、一応潰さないようにやっておりますので、その点は御安心いただければと思っておりますところでした。

○西川吉武（幹事長） はい、ありがとうございます。

○武藤義典（事務局長） あの県民会館が山響の本拠地になるのですか。

○加藤 総（山響ファンクラブ顧問） そのことをちょっとお話しします。2020年にグランドオープンするのですが、佐藤さんとはJOF Cの総会、どうもその年に山形に、巡り場になりそうだということで、できれば、多分、もちろん全部これからですけども、新しいホールの御紹介を兼ねたコンサートのときに皆さんお招きするのがいいんじゃないだろうか。スケジュールもこれからですので、その辺はもう少し時間を頂戴しながら御提案したいなと。

ホールと山響との関係については、今、山響がそのホールの指定管理を取ろうとしています。多分、取れると思います。ここだけの話にしておいてください。県の財団と、東京の大変著名なウィスキーを作っておられる会社の上の人辺りと一緒に指定管理を取ろうとしていて、それを前提にももちろん今作っている会館の中には山響の施設が全部入っています。もちろん練習するところ、事務局の場所、それから楽器、楽譜を交換するところというのが入っておりますので、いま最終、そのことについてのやり取りが行われていて、来週理事会があって、その理事会で山響の組織として決定するという事になっていくのではないかなというふうに思います。

ですから、大変なことだと思っております。とても大変、ホールを運営するという事について

でもとても重い責任があるということかなというふうに思います。山響のコンサートだけ今までみたいに貸館でやっていけばよくないので、ホール全体の指定管理を受けるということですので。大変重い責任を負うというふうな覚悟、楽団としてしようとしているということ。

○上田文雄（会長） それは、すばらしいですね。

○西川吉武（幹事長） いいことですね。

そんなオーケストラないよね。

○加藤 総（山響ファンクラブ顧問） そうですね。

○上田文雄（会長） 財政的にも、固まってくるというのですか。

○加藤 総（山響ファンクラブ顧問） 仰るとおりです。

○上田文雄（会長） そういう運営のプロとか、会場の、貸館専用のスタッフとか、きっちり確保しておかないと。

○加藤 総（山響ファンクラブ顧問） なので、さっきのウイスキーの会長さんあたりの力をかりるようなことになるのではないのかなと思います。基本、自体はもちろん、ステージの上で演奏するということについてが、最も大切なことですので、あと経済的な、それから信用としてのバックボーンについては、県の財団と一緒にやると。

ですから、信用のバックボーン、ステージの上、それからステージの裏という三つの組み合わせをジョイントベンチャーにして、指定管理に入っていこうと思います。

○西川吉武（幹事長） 群響と新しいホールとはどういう関係……。

○小野善平（群響ファンズ会長） 来年竣工の予定、ただ多目的ホールでございまして、一次は客席を優先して舞台が狭くなるという噂があったのですけれども、それは大丈夫になって、群響の合唱団員が約300人いたのですけれども、それは舞台に乗れるようです。

ただし、パイオルガンはつきません。それについては、県内の音楽関係者はブーイングをしております。群響に対しても評価がいまだに議員さんの中で余り高くないのかなというところがあります。

○西川吉武（幹事長） それは新しいホールができればそこがフランチャイズみたいになるのですか。

○小野善平（群響ファンズ会長） そうですね。おそらく、フランチャイズになると思います。ただ、今の音楽センターは、もともとは群響のために作ったホールなので、そういうイベントがありますので、あとは高崎の中のホールの引っ張り合いというか、綱引きがありそうで、その音楽センターのところの横にシンフォニーホールという練習所があるのですけれども、これはしばらく群響も使うということになっておりますけれども、それは出ていかないでしょうねと念押しされたという話もありますので、今後どうなってくるか。

○西川吉武（幹事長） 新しいホールってどこにできるのですか。

○小野善平（群響ファンズ会長） 高崎駅の東口にビックカメラありましたよね。その周辺の再開発で、そのコンベンションの建物ができて、その中の一つとしてホールが入るといふふうに聞いています。そういうことで動いておりますけれども、ただ、群響のファンとしては、ちょっと物足りないかなという感じは否めません。

パイオルガンが使えないということで、当初はつけるということになりましたが、県議会にだめと言われてアウトでした。それ市民運動でもう一回つけるという、盛り返した

という歴史ありますので。ぜひ、つけないと後でつけると大変ですよ。

評価が低いというのは、やはりホールのせいだと思うのです。ホールが自分の専用のいいホールができたら絶対うまくなりそうですね。

○西川吉武（幹事長） 絶対それはあると思う。

絶対うまくなる。

○小野善平（群響ファンズ会長） これですね、パイプオルガンとかというのも実は署名活動とかまでしたのですけれども、やはり色々政治的なところで結局それ、提出遅くしようということになってしまったのです。ですから、全国、本当に署名活動を行っていたのですけれども、もうこれは来年竣工ですから……。大友さん自身も非常に精力的に掛け合っていたのですけれども、効果なしですね。もっと言うと、主体が高崎市とかなのですよね。どちらかという、こちらのほうから採算性が取れないということも含めて、最終的な判断としてなしになったということですから、北関東もみんなで作らなければ、ほかのところで、それから群響の本拠地がつからなければいけない、そういう役割があるのではないかなということもなかなか浸透していただけなかったというようなのが実際なのです。

○西川吉武（幹事長） なるほどね。それぞれで事情があるようですね。長島さんのところは、どうですか。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） ではちょっと、ホールのほうだけ、まずは仙台では音楽ホールがないないと言い続けて、じゃあどうするのということに対して答えをずっとださなくてきているわけです。ところが昨年からは有識者と言われる人たちの会議を立ち上げて、そこで検討していたわけです。ところが話を聞いていると、どうもこれからは多目的ホールのようなものもいいとか、当然パイプオルガンの話は出ません。

あと、採算性とか、そういう話は先行しているのです。そこでどんな感動、どんな音楽の種類をやっていくんだというのは表に出てこないのですね。だから非常に寂しいというか。話の中身が貧しいというか、そういうふうなところなんです。ですので、当然そこで今、ある意味動いていますので、まだ具体的に場所とか、公表されてないというか、その話を見て決めるというようなことも順番なのでしょうけれどね。だから、来年の段階で果たして話が進展しているのかどうか。そこはちょっとある意味、期待薄というところがあります。ホールに関してはそういうことです。

○西川吉武（幹事長） なるほどね。

○上田文雄（会長） 歴代市長さん、色々気にされてきましたけれどね。難しいですね。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） あと、ちょっと市街地に広くて便利な土地がもうなくなってきているということもあります。

○上田文雄（会長） 大山さんの支援何かないの。

○小野善平（群響ファンズ会長） 大山さんはお声を願って自分の会社からも当然身銭を切って寄付作ったりしているんだけど、やはりそれが呼び水になってほしいのですけれど。

ここに本当に来られてね、市の幹部の方と、いや、いいもんだなと言っていますけれども。作るんだと思っていましたけれども。

それで、困っています。正直言って。

○西川吉武（幹事長） 篠原さん、何か話題ないですか。

○篠原敏修（都響倶楽部代表） 色々あるのですけれど。こういうところでお話するようなことかどうかわからない。

世代交代という、このJ O F Cの世代交代の話出ましたけれど、実は都響倶楽部も世代交代の話というのはずっと前からあるので。僕も実は7年間やっているのですね、これ、代表って。それまで都響倶楽部を7年間もやった人はいないのです。なぜ7年間やっているかという、譲る人がいないのです。それはお前、後継者を育ててこなかったからだと言われるのですけれど。これなかなか大変でして。

やはり色々な意味で意識が、聴衆の意識が変わってきているということがあるのと、それからさっき山響で話題になかったですか、オーケストラが大丈夫だとなると、これ都響倶楽部ってやはり都響は一時期その補助金をガンと切られてどうするんだと。で、団員の契約を変えるとか大騒ぎになって、ひょっとして都響潰れるのではないかということが、ちょうど世紀をくぐらないところであったんです。それと、大体タイミングをあわせてできているんです、都響倶楽部っていうのは。だからその機関という、やはり裏腹できているところがあるのです。

今は都響は、そういう意味ではそういう財政的な問題というのは全然ないわけです。そうすると、何というか、都響倶楽部を作った時の非常にボランティア精神も今は増えたり、我々が都響を支えるんだみたいな。都響はパートナーですと書いてありますから、我々都響倶楽部のマニフェストというのは。すごいんですよ。

そういう意識の高い人はやはりいなくなってくるね。今はもう要するにファンクラブ的、非常にファンクラブ的な要素が、色彩が強くなって。別にそれは悪くない、悪いことではないのですけれど、随分意識変わってきたので、やはり中身を変えていかなければいけないと。人を変えていかなければいけないというふうに思っているのです。でも、みんな忙しいから、若い人はなかなかこういうことをできないのです。

だから、やっぱりリタイアした、そういう時間に余裕ができた人というふうになると、その人たちの考えが不一致になってくる。ちょっと難しい問題抱えています。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） 来年のことで、皆さんの考えを聞かせてもらえますか。済みません、1時にうちの会員を集合させているものですから、その前どうしてもこの件だけは。

来年の運営に当たりましては、基本的には当会の身の丈に合った中身とサイズにさせていただきますので、そこは御了解いただきたいなということがあります。あと、率直な御意見をいただきたいのですが、当会のほうで、窓口になっているホテルを手配する必要というのはございますかね。そのほうが、あったほうがいいということであれば、そのようにいたしますし。ただ仙台市内、値段はばらばらなのですけれど、数は沢山あるものですから、すごくそれぞれの団体なりに申し込んで、取っていくという手もあると思うのですけれども。

○佐藤佳世（仙台フィルハーモニークラブ事務局長） 今、結構トリバゴとか、皆さんネットで簡単にお安くとる方法を皆さん御存知じゃないですか。プロじゃなくても。逆に、何かそれよりも皆さん私たちがとって確保するよりもお安いネットで取ったりとかすることがみんな各会にお得意な方二、三人いらっしゃるんじゃないかなと思うのですけれど。

逆にそのほうが、お安く来ていただけるし、飛行機なり新幹線の手配なりもいくらでも今方法がありますので、そのほうがいいんじゃないかなということ、ちょっと私たち考えているのですけれども。いや、それでも、ちゃんと確保してくれないと心配で行かれないというお話があるのであれば、考えます。いかがでしょうか。

○佐藤佳世（仙台フィルハーモニークラブ事務局長） 多分、その日に大きい大会がその場所にあると、取ってきたほうがいいということになるかなと。

○西川吉武（幹事長） 例えば学会とか、楽天があるとか。

それがわかった時点で任せてもいいかと……。

○佐藤佳世（仙台フィルハーモニークラブ事務局長） 11月だから野球はないと思うのです。あ、11月23日っていつも楽天がファン感謝祭なのです。それで結構そういうふうなお客さん来るときもあるので、もう1年前から決まっていれば取って、ネットで取るのが簡単じゃないのかなと思うのですけれども。

○西川吉武（幹事長） 基本的には各団体にお任せで結構です。

よろしいですか。

できるだけ負担を減らしましょう。ただ、取れないのは札幌と金沢なのです。一番取れないのは。

○佐藤佳世（仙台フィルハーモニークラブ事務局長） 大丈夫です。新しいホテルばかりできましたから。

○西川吉武（幹事長） 名古屋は取りやすくなってきました。前回の、去年の金沢は、名古屋に泊まったほうがいいね、というので名古屋に一泊しました。

○河内芳人（石川県立音楽堂楽友会代表幹事） 金沢、なんでかしらないけれど学会がすごくあるのです。

音楽堂の運営としては、オーケストラの演奏会するより、土日全部学会に貸し出した方が儲かっていいという話はよく聞きます。

○長島榮一（仙台フィルハーモニークラブ会長） 済みません、もう1点あるのですが、今回2日目にホールの見学を準備しておりましたよね。そういうふうな、2日目の催事について、どう考えるかなのです。前回うちのほうではどうしても震災から間近でしたので、私どもとしては被災地まわってほしかったので、ああいうふうに仮設にさせていただきましたけれども、その辺についてやはり何らかの形のものは2日目に入れるべきとどうするか。

○武藤義典（事務局長） それはもう、やらなくてもいいんじゃないですか。

○西川吉武（幹事長） 予定がある人は、それぞれ自由に予定たててまわれると思いますし、震災のような、ああいうまわり方だとできないかもしれないですけれども、もう、そういう意味では今回たまたま地震があったのでだめになってしまいましたけれど、そういうことがない限りは、今回も新しくホールができるということで企画したので、そうであればそんなに…。ひやりというか、一泊二日で帰ってしまう場合もありますので。そんなに気を使っていたかなくてもよろしいのではないのでしょうか。

○武藤義典（事務局長） そのほうがいいですよ。余り気を使わないほうがいい。ぜひ見せたいものがあるんだったら、それはそれでいいと思います。

○西川吉武（幹事長） その辺は主催者側、断っておくけどこういう催しを息長く続け

るコツというのはとにかく無理しない。

それと、楽しさ優先。だから、それぞれがツアーを組んで行くということも可能だし、色々なやり方があるのだろうと思うのだけれど。こうしなければならないということはない。何一つない。

コンサート聴けて、みんなで雑談できればいい。そこが担保できていけばいいわけですから。だから今回、都響さんが企画してくれた交流会で総会はなしというやり方だってこれから当たり前だと思うのですね。やはりなぜかオーケストラを聴く、地方オーケストラを聴いてくるというのは、やはり参加者多いのですよ。私ども。だから毎回私ども17名だとか20名だとかって、それぞれに伺うのですけれど。やはりそれだけファンがいるということなので、だからこれは大事にしたいなというふうに思っていることですから。

決して無理せず、それはそれぞれで企画してください、という程度のアナウンスも結構です。できれば、そうしていただきたいというふうに思います。

いいですか、皆さん。

○佐藤佳世（仙台フィルハーモニークラブ事務局長） ありがとうございます。その意見は持ち帰って、お家のほうで準備に帰らせていただきます。

○西川吉武（幹事長） それから、広島さんその後の状況はどんなものなのですか。

○佐藤幸一（広響フレンズJOF C担当） ぜひ、ずっと御報告しなきゃいけないと。今回、まず……。

○西川吉武（幹事長） ちょっと短めに。時間が……。

○佐藤幸一（広響フレンズJOF C担当） まずは、現在、報告書出す状況でないので、全く出していません。再建しようということですずっと話し合ってきたのですが、結局のところみんなそれぞれの思いがてんでばらばらで話ができなく、それぞれの思いが全部、年取ったり、自分の思いが強すぎてうまくいきませんでした。

私は手書きで報告しました。多少出すぎた人はおりまして、そういうほんのわずかなつながりも切れて、みんなが何か疑心暗鬼になってしましまして、そういう話できなくなつて。だから結果としては、私、再建会とか何とか書いているように、一応、広響フレンズという形はあるのですが、いつの日か何かつくるか、または若い、先ほどの世代交代というか、どなたかやる気ができる人が参加できるまで、我々もできる範囲で、有志だけでも、そういう再建できるような人的なつながりだけつくっておこうというふうになりました。

そういう広響フレンズという名前はもちろんありますし、何らかで活動はできますが、決まったような活動はしていませんので、今回、この私と、あと2人もそれぞれ全く別な思いで参加しております、それが一つです。

だから、今後もちよっとただ存在するだけでというか、別にあれじゃないですけども、そういう感じで私個人としては来年以降も参加していきたいと思えます。

もう一つは、余り長くなってはいけませんが、一つはオーケストラのファンクラブというものが、これ今まで考えていたのですけれども、ここでの皆さんのお話、それから今回の再建のそれなりの活動というか話し合いを考えていて、オケのファンクラブというのは、全くほかのスポーツとか芸能人のファンクラブと違って、目的とか活動の内容とか、人的な配置みたいのが全てばらばらで結構。ただ、オーケストラを支援する、その思いだけでやればいいと。

だから、ほかのファンクラブが成功しているからそれを真似しようとか、失敗したから、それをやらないでおこうとかではなくて、全ての活動は参考になり、自分たちでやりたいということで、まず、それこそ1から0.5から始めて、だんだん長く続いていくのではないかと思いますので。そうしないと、だから、例えばある定期演奏会に行く人を増やす、その活動だけでいこうと、それだけでもいいと思うのです。あとは、幹事会などは、どこかの喫茶店で毎回やるとか、そういうことで規約とか何かも全くつくらなくても、それで一つの何とか団体というファンクラブでいいと思うのです。

そうしないと、実は我々の広響フレンズというのは、もともとは広島交響楽団が定期演奏会の、特に提携会員を増やすために県費からの援助を停止させないために、これだけの人数、ファンがいるんだよということを示すためにつくられたものなのです。その中で、何か活動しなければいけないからというので、我々スタッフが生まれたのです。

ですから、その楽団と、それからオーケストラのメンバーのユニオンの支援でかなりのことはできました。合同のハイキングとか、ボーリングとか、花見、それからホールにおいて30人くらいオーケストラのメンバーが参加した総会、交流会とか、そのほかのクラブに負けられないような活動をしたのですが、それはあくまでも上からの支援があつてのことです、自分たちの力では全くできないということです。

ところが、それが打ち切られて、自分たちのものをつくろうというときに、各個人が成功体験だけを元に、自分の理想を結局、てんでんばらばらで、全くの一からつくることが、一つには成功体験があること。それぞれの人が皆さん、もう年をとってしまして、自分の仕事における成功、またはロスとか何かの活動における成功、そういうものがあるわけです。自分だけが、いい意味で唯我独尊が強かったわけです。それがもう、一つの、それでもう、結局もう、今年、いつの日がもうやめようということで、一応、そういうことで将来のために我々が現在残って、今後、単体というか、有志だけ残って活動していこうという、現実的にはそういう考えであります。

○西川吉武（幹事長） 了解しました。

私どものほうもJOF Cの加盟団体との個人だろうが、仲良しグループであろうが、名乗った団体で登録していきますので、別に再建会でなくても何の広響フレンズで結構ですので。一人でも広響フレンズですから、全然かまいませんので。そういうことで、JOF Cに協力いただけるなら、今後とも普通の名前で結構ですので、参加いただければありがたいと思います。

○佐藤幸一（広響フレンズJOF C担当） だからいい意味で今後とも頼りにしていただき、利用すると言ったらおかしいですが、これからも、よろしくお願いします。

○上田文雄（会長） これは広響の事務局長さんに、広響フレンズよろしく申し上げますと言っておきますので。

○佐藤幸一（広響フレンズJOF C担当） 事務局長のほうに、ほぼ、ほぼだめですすのニュアンスだけ伝えてあるのですが。

○上田文雄（会長） どんどん言ってください。水戸黄門が言っていたよと……。

JOF Cってすごいですという話をちらっとして。

○佐藤幸一（広響フレンズJOF C担当） 28年くらいだったら総会開けたんですけど、ちょっとまだ、時期的にちょっと……。

○西川吉武（幹事長） 気にしないでください。佐藤さん一人いれば、交流会開けますから。

あと山田さん、ないですか。

○山田博子（名フィル・ファンクラブ代表幹事） はい。事務局ともうまく、来年で20年やっています。

それで細々で、倒れそうな、いつなくなってもいいような感じですけど、私の根性と情熱だけで続けてきたのですけれども、ミニコンサートそれからキッズコンサートです。それから会報誌、会報誌も今まで6ページあったのが、皆さん非常に会報誌は新人の紹介とそれから事務局内でリレーで記事書いてもらって、これも上手にやっております、あと私がこれからやろうと思っている、いつも撮ってくれているカメラマンとか、そういう縁の下の力持ちの人たちにもこれから目を向けて記事、インタビューか記事を書いてもらってやっていこうと思っています。

それから、今度3人しかいないわけです。それで、2人は現役で、私も会社やめるから非常に使い勝手がいい女なものですから、色々なことを頼まれて、ちょっとなかなか集中してできないのですが、性格的に何しろ言っぱなし、やりっぱなしというのは余り好きなほうではないので、2016年に名古屋でやっていただいたときに、ファン拡大ということを大きく取り上げ、自分自身取り上げて、皆さんに呼び掛けた責任ということで、ファン拡大をやろうということで、自分で決めました。

それで、まずはキッズコンサート。0歳児から、いつそんなの実るのと言われますけれども、そんなこと言っていたら全然だめなので、これは去年、一昨年くらいから始められて、今度の11月第5回やることになりました。

それで、やはり世の中でキーワードが子供なのですね。それで、子供ということで、余り激しく頼むこともなく、サントリーさんとサッポロさんが応援してございまして、キッズコンサートをやった後に交流会30本くらいやるのですが、ここで飲み物だとか、食べ物出してくださったり。

それで、こういうことを20年もやっていると、色々な人たちとの音楽家との交流会がありますので、みんな自分たちの何かを発表したいのですけれども、コンサートをやりたいのになかなか機会がないということなので、皆さん何度も私が言っているように三井住友銀行と今、色々共催でやっているわけですから、銀行に頼み込んで、銀行と両方で数えましたら、西川さんにこの間、1回自分でリストアップして送ったら、2年間で20公演。名フィルとは関係なく、音楽ということでやったのが20公演ありまして、大体100人以上皆さん来ていただきました。そういう意味では、自分なりにはできているかなと。

一つ、私も第3回の群馬から参加させていただいた、私自身もあれなのですが、毎年出ても、非常にこういう分科会なんかでいろいろなことを話し合うのですけれども、そこで終わってしまっていて、次の年にじゃあ話し合った結果、皆さん持ち帰ってどうなったのかという結果とか、そういう、結果でなくても今やっていますとか。こういうふうに悩んでいますからという。そういうところを、ちょっとの時間でも、次の機会に発表して、解決の一つの糸口みたいなのを、「あ、こうやればいいよ」という。私、わたし豊田にいましたので、「横展」という言葉が、横に展開、いいことも悪いことも。失敗例も、こんなことしたらだめですよということも言ったり、それからさっきみたいにこんないいことが横に

展開するということでみんな情報共有しながら、もうちょっとこの質を上げいったらいいんじゃないかなというふうに思っています。

偉そうなことを言っても、できることは少ないので。皆様の協力を得ながら、協力を得るということも一つ大きいなというふうに思いました。

○西川吉武（幹事長） ありがとうございます。

以上のような情報提供も含めて、この幹事会を終わらせていただきます。

○加藤 聡（山響ファンクラブ顧問） 済みません、私からちょっと一つお願いが。マスコミの取材についてなのですが、実は産経新聞社さんの北海道支部局長さんが、この間まで山形支局長さんをやっておられて、私、大変親しくさせていただいて、今日の話をしたら、是非取材をさせてほしいと。大変フランクな女性の記者さんで、上田会長のこともよく御存知のようなお話だったので、演奏会から自分でチケットも買ってきて、新聞記者さんなので出入りするかもしれませんが、今日の御取材と、懇親会ももちろん会費は頂戴はすることにさせていただいて、もし参加が可能であればぜひお願いできればなというふうに思っていますので。大変事務局側で御検討いただけるかどうかということなのですけれども。

○武藤義典（事務局長） 総会からは、北海道新聞の取材が入ります。交流会まで取材するかどうかちょっとわかりませんが、総会は間違いなく取材が入ります。

ただ、それ以外はまだ聞いていませんので、入られる場合は入られるって。ただ、席につかなければ、交流会は会費も要りませんし。

○加藤 聡（山響ファンクラブ顧問） 会費は要らないということはあれだと思いますけれど。もし、御参加させていただいてよくて、本人もぜひということであれば、それは会費も含めて話をします。

○武藤義典（事務局長） 会費が要らないということは席がないということですので。料理は無理ですが、飲み物は。

○加藤 聡（山響ファンクラブ顧問） 了解しました。ありがとうございます。

○西川吉武（幹事長） 幹事会もいつからかずっと開催するようになって、お互いのトップ同士がこうやってそのファンクラブをどう運営していくかということの話し合いができるということは、とてもうれしく思います。また、先ほども申し上げましたように、3月17日、都響倶楽部のJ O F C交流会ありますので、ここで上田会長も行かれるようですし、加藤さんも行かれるようですから、何かお集りができるだろうというふうに思いますので。ぜひ、未来を語ってみたいというふうに思います。